復興庁
Reconstruction Agency

ジモトではたらく

岩手県版

令和３年１月発行

地元就職のススメ

地元か地元以外か。
働く場所は、就職を決めるときに
頭を悩ませることの一つです。
実は地元には、地元ならではの特徴を生かし、
事業を展開している企業がたくさんあるのです。
また、その地域で働いているからこそ得られる
喜びや魅力があるものです。
働くということにおいて、
「ジモトではたらく」という選択をした人たちに
スポットライトを当てて、
地元企業の仕事や地元で暮らす魅力を紹介します。
今こそ「ジモトではたらく」ことに注目してください。

Contents

地元就職のススメ …… 2
巻頭インタビュー …… 4
地元にもチャンスがある
自分らしく成長できる働き方を見つけよう
横田　浩一さん
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授
故郷で見つけたやりがいある仕事
商品開発で地元の復興を支えたい …… 8
小山　明日奈さん
藤勇醸造株式会社 商品開発・広報担当 2016 年入社
釜石の魅力創出をプロデュース
菓子店 3 代目社長の挑戦 …… 12
菊地　広隆さん
有限会社小島製菓 代表取締役 2012 年入社
地域の魅力を全国に発信
住田町のファンを増やしたい！ …… 16
植田　敦代さん
一般社団法人 SUMICA 副代表理事 2015 年設立
都会と地方の違い …… 20
地元で働くことを考えよう …… 23

巻頭インタビュー

地元にもチャンスがある
自分らしく成長できる働き方を見つけよう

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　横田　浩一さん

コロナ禍で注目「地方で働くこと」

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、世の中の仕組みが大きく変化しています。それは、就職や働き方を取り巻く環境についても、例外ではありません。特にリモートワークやテレワーク、副業など、働き方の分野において、大企業でも改革が加速したと感じています。

リモートワークは、2020年4月の緊急事態宣言を受け、都市部を中心に急速に拡大。東京では宣言の解除後も、出社率を半分以下まで減らしている企業があります。さらに、「アフターコロナ時代」を見据え、一部の大企業ではリモートワークの常態化や、本社を東京から地方に移転する試みなどが始まっています。

私が仕事で全国各地を訪れ、若者の声を聞くと、地元で働きたいと思っている若者がたくさんいます。しかし「やりたい仕事が無い」「給料が安い」という理由で、東京や都市部に関心が移ってしまう。こうした構図がこれまでありました。

コロナ禍を機に、東京にいないと働けないという状況は崩れつつあり、「地方で働くこと」に関心が集まっているように感じています。おそらく今の若者も、同じ感覚を抱いているのではないでしょうか。

未来への不安と働きがいの低さが課題

コロナ禍の影響により就職活動が大きく制限される中、学生たちは想像以上の苦労を経験しているはずです。

さらに、これからの「人生100年時代」に向け、年金の受給額も少なくなることが予想されます。また、同じ会社に長く務める時代から、転職が当たり前の時代に向かっています。

こうした混沌とした状況下で、自分のキャリアについて悩み、不安を感じている若者が多いことでしょう。私も学生から、「どういう仕事に就いたらいいか」「どんな企業を選べばいいのか」という相談をよく受けています。

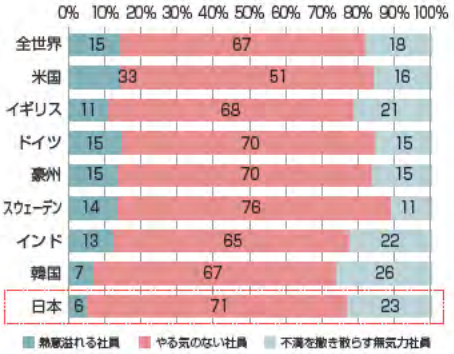
将来について不安を感じる若者が多いことは、就職を取り巻く課題の一つと言えます。

また、日本のビジネスパーソンの仕事に対するモチベーションの低さも問題となっています。東京の企業で働く人のモチベーション、つまり「働きがい」は、先進国の中で最低といわれていて、ある海外の調査で、日本には「熱意あふれる社員」の割合が6%しかないという報告もあります。（図1）

その理由として、利益優先の企業体質や良い先輩ロールモデルがいない、チャレンジできる機会が少ない、組織の閉塞感などが指摘されています。

実は、国が進める働き方改革は、ワークライフバランスや残業時間の削減など、働きやすさを向上させるもので、働きがいを向上させるものでは無いと考えています。これからは、働きがいがある仕事や会社を選んでいくことはとても大切になることでしょう。

図1　世界各国の仕事への熱意度調査



「State of the Global Workplace (2017)」GALLUP社　より作成

実はあまり変わらない 東京と地方で働く意識

CAREER FORが行った「東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査」※1によると、「働きやすさ」と「働きがい」を比較した結果、東京と地方では明確な差が表れませんでした。（図2）

この結果は、良い仕事が多く、平均年収も高い「働きがいを感じる東京」。そして、自宅と職場が近くワークライフバランスもとりやすい「働きやすさを感じる地方」という予想に反した意外な結果となりました。

こうした、実際に働く人の意識調査からも、地方で働くデメリットが少なくなっていることがうかがえます。

大企業で働くことは、大きな組織の中で成長できることに期待しがちです。しかし、小さい組織である地方の企業の方が、若いうちからさまざまな仕事や立場を経験でき、早く成長を実感することができると考えています。

また、大企業ではたくさんいる同僚やグローバルなビジネスを通して出会う人たちによって、多くの経験や人脈を獲得することができます。しかし、オンラインでできることが増えた時代。自分の努力次第では、地方でも同様のことが可能だと思っています。

そう考えると地元就職のデメリットは、それほどないのではないでしょうか。

「地方は東京より人が少ないが、声を掛けてくれる人はたくさんいる。地方の方が幸せを感じることができる」。これは、愛媛県で地域おこし協力隊に参加した学生の言葉です。

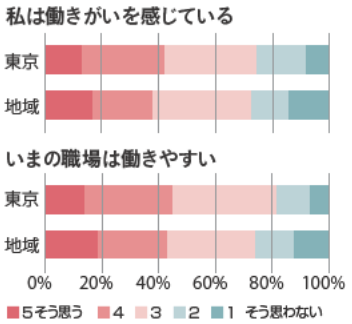
地方で働くメリットは、豊かな人間関係の中で生きる喜びを強く感じられること。最近は、高い収入を得ることだけが幸せな生き方ではないと考えている若者が多いと感じています。

働きやすさや働きがいにあまり差が無いわけですから、「東京か、地方か」と二者択一で悩む必要はないと思っています。地方と東京を行き来する「2拠点生活」を送る人も、これからもっと増えていくはずです。

※1東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市(岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンなどが対象。P20に調査内容の一部を記載

図2　東京と地域の働きがい・働きやすさの比較



「ローカルキャリア白書2019」CARRER FORより作成

働きがいと働きやすさについて、「そう思う（5）」「ややそう思う（4）」の合計を比較すると、東京と地域で大きな差はなかった。

将来の目標を思い描き 成長できる企業を見極める

これからは、転職や起業が当たり前の時代。ということは、自分の価値やスキルを上げることができる会社選びが重要になります。そのために、就職を希望する企業で自身が成長できるかどうかを見極める必要があります。

その目を鍛えるために、まずは将来何をしたいのか、自分のビジョンを描いてみることが大切です。40歳、50歳になった時、どんなことをしているのか。

もちろん、複数あっても構いません。「起業して社長になる」「牧場主になる」「ゲストハウスを経営する」など、さまざまな夢や目標を思い描いてください。

長期的なビジョンを描いたら、実現のためにこの1年で何を努力するのかについて考えることが重要です。将来起業したい人は、学生のうちからビジネスプランコンテストに応募したり、卒業後にスタートアップ企業※2に就職したりと具体的に考えてみましょう。

取り組んだ結果、1年で目標が変わってしまっても問題ありません。努力したことは、成果として残り、次に生かすことができます。まずは、行動に移すことです。

当然若いうちは迷い、なかなか好きなものが見つからないことも確かです。しかし、若いうちから将来の目標を確立することができれば、給料や知名度だけで就職先を選ばなくなると思います。

そして、就職してしまうと、どうしても目の前の仕事に追われてしまいますが、時々将来の目標について見つめ直してください。

※2 スタートアップ企業
まだ世に出ていない、新たなビジネスモデルを開発する企業のこと。一般的に、創業から2～3年程度の企業を指すことが多い

多くの社会人の声から 刺激を受けてみよう

就職活動を前に、学生のみなさんには、多くの社会人の話を聞くことや、会ってみることをお勧めします。就職先に悩む学生の多くは、親の職業あるいは「学校の先生」という職業しか知りません。考える職業の選択肢が少なくては、良い就職先にたどり着くことは難しいからです。

NPOで働いている人や役場で働いている人、起業している人、経営者など多種多様な人に触れることで、刺激を受けながら職業観を育ててください。

実社会が抱える課題やニーズを解決するために働く人の声は、仕事のイメージをつかむ最高の教材。学校でも社会人の話を聞く機会があるはずですから、積極的に参加して多くのことを吸収してほしいです。

特に被災地では、復興支援のため多くの人が移住し活躍しています。東京で働いていたときは、地方では想像できないほどの高給で働いていた人たちもいるはずです。

こうした人たちがその地域を選んで、みなさんに多くのことを伝えに来てくれているわけですから、チャンスを逃さないでください。そして、輝かしい未来を思い描いてみてください。

多くの社会人の声に耳を傾けて 選択肢と夢を増やしましょう！

横田（よこた） 浩一（こういち）
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任教授

早稲田大学卒業後、日本経済新聞社に入社。2011年同社を退職後、株式会社横田アソシエイツを設立。2015年～慶應義塾大学大学院特任教授。企業のブランディング、マーケティング、CSV、HRM、イノベーション分野に携わると共に、地方創生に係る。共著に『SDGsの本質』『愛される会社のつくり方』『ソーシャル・インパクト』など多数。釜石市の地方創生にも携わる。

ジモトではたらく

故郷で見つけたやりがいある仕事 商品開発で地元の復興を支えたい

小山（おやま） 明日奈（あすな） さん
藤勇醸造株式会社
商品開発・広報担当
2016年入社　釜石市出身　32歳

地元の味を支える老舗醸造店で新商品の開発を手掛ける

釜石市にある藤勇醸造株式会社は、間もなく創業120年を迎える老舗の味噌・醤油製造所。小山明日奈さんは、同社で広報や商品開発などを担当している。

「ホームページやSNSを使って商品を全国の人たちにPRしたり、新しい商品のコンセプトやアイデアを考えたりしています」

新商品の開発は、小山さんが中心となり、コンセプトの考案から味や製法まで、社員が協力して行っている。またパッケージのデザインは、首都圏や県内のデザイナーとやりとりを重ね検討しているという。

「商品開発の仕事の魅力は、私たちが考えた商品のイメージを、実際に形にできるところ。新しい商品が完成した時はとてもうれしいですし、その商品がお客様に喜んでいただけたときは、仕事への自信とやりがいにつながります」

老舗のイメージにとらわれず女性目線、若者目線を大切にする

釜石の製鉄所と北九州の八幡製鉄所との人的交流があったことから、同社が醤油の醸造を始める際には、九州地方で馴染み深い甘い味が採用された。これがきっかけで、釜石でも甘い醤油文化が根付いたという。

「三陸地域で甘いお醤油が親しまれているのも、釜石がルーツなんですよ」と小山さんは誇らしそうに説明する。

また、新商品の開発やパッケージデザインを考える際には、老舗のイメージにとらわれることなく、女性が好む「かわいらしさ」や「おしゃれ感」を意識している。

菓子やドレッシングなどにも十割糀みそが使われている。

「弊社では、お味噌やお醤油、糀など女性が使うことが多い商品を取り扱っています。お客様の目線を大切にした商品開発を心掛けています」と小山さん。

特に今の若者は、モノにこだわる人が多い。そういった人の心にささるような商品を作りたいと思っている。

県産素材にこだわった新商品 地元の味を守り継ぐ

釜石市で生まれ育った小山さんは、2016年に叔父が社長、父が専務を務める同社に入社した。

商品開発の仕事は初めての経験だったが、社員やプロのデザイナーと協力し、これまで6つの新商品を開発している。

その一つが岩手県産の大豆を使用し、無添加にこだわった「十割糀みそ」である。また、この味噌を使った「十割糀みそケーキ」は、支援ボランティアが縁で小山さんが知り合った東京のシェアキッチンに集まる女性と共同開発したもので、地元の洋菓子店がレシピを引き継ぎ、製造を担当している。

さらに、「五穀甘糀」の開発では、米麹に、県産のひとめぼれ、5種類の雑穀をブレンドし、砂糖やアルコールを使わない自然の甘みを引き出し、2019年の優良ふるさと食品中央コンクールで部門最高賞となる農林水産大臣賞を受賞した。

ボトルに詰めた甘酒を確認する。

「これからも、自信をもって世に出せる商品を作りたいですし、藤勇の商品をよりたくさんの人に知ってほしいと思っています」と話す小山さん。社員や地元の人たち、首都圏の専門家らと一緒に新商品を世に送り出し、釜石の伝統の味を守り継いでいく考えだ。

小山さんのある日の動き

- 8:30 **出社** メールをチェックする
- 9:00 **甘酒の製造** 完成した製品をボトルに詰めるなどの作業を行う
- 12:00 **昼食**
- 13:00 **打合せ** 商品開発やデザインについて打ち合わせをする
- 15:00 **納品** 取引先の店舗などに商品を届ける。売り場の状況も確認する
- 16:30 **終業** 会社に戻り仕事を終える

上司に聞く

専務取締役
小山 和宏さん

同業者からも高い評価 感性を生かした商品開発で貢献

流通しているさまざまな商品が、女性受けするものがトレンドとなっている今、女性ならではのセンスを生かした斬新な商品開発に大いに貢献しています。

商品開発において、私だけでは、どうしても老舗のイメージを前面に押し出してしまう。そこに小山さんが加わったことで、新しい風が生まれています。

取引先や一般のお客様、同業者からも「いいデザインだね」と大変好評です。この調子で商品開発にさらに磨きをかけてほしいと期待しています。

また、今年は20代の女性を社員に採用したので、良き相談相手として支えてほしいと思います。

岩手県ではたらく魅力

首都圏と海外での生活を経験 その間に発生した東日本大震災

子どもの頃から本を読むのが大好きで、将来は出版社に就職し、本と関り続ける自分の姿を思い描いていた小山さん。海外へのあこがれもあり、地元にいてもやりたいことは見つからないとして市内の高校から山梨県内の大学へ進学し、カナダでの留学も経験した。

東日本大震災が発生したのは大学生の時。地元釜石市は津波によって市街地が甚大な被害を受け、叔父、父が勤める藤勇醸造も社屋が半壊し、仕込んだ50トンの味噌も使い物にならなくなった。

復興が進む故郷に感化され できることを求め帰郷を決意

故郷のことが気になりつつも、東京で派遣社員として事務職や服飾の販売員を経験した小山さんは、しだいに自分の将来のことも考えるようになった。藤勇醸造は、会社存続の危機に直面したものの、市民や取引先の励まし、復興支援ボランティアの助けを力に醤油・味噌の製造を復活させたと聞く。自分は東京で無為に時間を過ごしているのに父が釜石で会社やまちの復興のために頑張っている。自分は、どこで何をすべきなのだろうか――。

結果、自分もまちの復興に関わりたいと考え、釜石に戻ることを決め、2014年からNPO法人のスタッフとして復興支援に関わった。

翌年、父と叔父に誘われ藤勇醸造の新商品の開発に参加、2016年に正式に同社の社員となった。初めて開発した「十割糀みそ」のパッケージには、藤勇の屋号が彫られた木製の活字を採用した。

採用の理由について小山さんは言う。「活字は、津波で被災した印刷所からボランティアの手で偶然発見されたものなんです。新商品のパッケージをデザインするにあたって、これまでご支援をいただいたみなさまへの感謝の気持ちを込めて、この木版活字を採用しました」

地元で自身の可能性を広げ 縁の大切さを知る

故郷に戻った小山さんは、商品のPRや新しい商品の開発というやりがいのある仕事と巡り合うことができた。「このまま東京に残っていたら、このようなチャンスは得られなかったと思います。復興を進める地元のためにも仕事を頑張りたい」と語った。

また、「地元の将来について思ったことを遠慮なく言い合えるライバルでもあり、仕事のモチベーションにもつながっています」と、地元にいる同世代の仲間の存在も大きいと小山さんは言う。

商品開発の仕事を通じて、人との縁や地域のつながりの大切さに気づかされた。2019年には、化粧品メーカーとのコラボで、米糀の甘酒を使った化粧水を商品化した。

AsunAmoon（アサンアムーン）と名付けられた商品名の一部には名前の「ASUNA」が隠れている。

「それだけに思い入れが強い商品です。たくさんの方に使って喜んでいただけたらうれしいですね」と話す小山さんの表情は充実感であふれていた。

パッケージに屋号の木版活字をあしらった十割糀みそ。

糀を使った化粧水 AsunAmoon（アサンアムーン）。

支援への感謝をかみしめ醤油の完成を待ちわびる。

小山さんのオフショット

休日は家族とドライブに出かけて気分転換をするという小山さん。「目的地は主に岩手県内ですね。沿岸部に住んでいるので、内陸の景色はとても新鮮です。あらためて岩手県の広さを実感しています」と話す。

旅先で出会った岩手の人と新しいつながりができ、釜石や藤勇醸造のファンになってもらった。「場所は違いますが、岩手県を盛り上げたいという同じ思いを持った仲間から、刺激をもらっています」

後輩へのアドバイス

「地元にいてもやりたいことは見つからない」と釜石を飛び出した私ですが、やりたい仕事を見つけることができたのは、地元に戻ってからでした。

東京や海外での暮らしを経験してみて思ったのは、何をしたいかという目標を持っていれば、実現できる場所は都会でも地元でもあるということ。ポイントは「どれだけ人とのご縁をつなげることができるか」です。

地元は都会と比べて、人とのつながりが深いと思うので、地元との関わりやご縁も大切にしながら、将来の夢に向かってたくさんのチャレンジをしてほしいと思っています。

企業情報

藤勇醸造株式会社

所在地／岩手県釜石市大渡町 3-15-32
TEL／0193-22-4177
HP／https://www.fujiyu.com/
代表取締役／藤井 徳之
創業／1902年
資本金／1000万円
従業員数／11人（2020年12月現在）
事業内容／味噌、醤油製造販売

ジモトではたらく

釜石の魅力創出をプロデュース 菓子店3代目社長の挑戦

菊地（きくち） 広隆（ひろたか） さん
有限会社小島製菓
代表取締役
2012年入社　釜石市出身　38歳

岩手県内の広い地域にお菓子と笑顔を届ける

2020年8月末の某日、有限会社小島製菓で社長を務める菊地広隆さんは、釜石・大槌地域産業育成センターにいた。研究開発から新事業創出まで、地域の産業を支援する公的機関である同センター。その一角に小島製菓の新工場が同年9月から稼働を始めるためである。

図面を手に慌ただしく動き回り、スタッフや施工業者と一緒に準備を進める菊地さんは、「本当に時間がないんです」と語りながらも、その顔はどこか晴れやかだ。

菊地さんが勤める小島製菓は、1945年に釜石市で創業。市内小学校給食用のパンなどの製造から始まり、その後スーパーや店舗向けに日配品（店舗向けに作られ、お店に毎日配送される食品）の生菓子の製造を始めた。

現在は、宮古市から大船渡市の沿岸部を中心に、遠野市や花巻市、北上市まで、岩手県内の広い地域で生菓子を届けている。

カフェで提供するスイーツ。

30代で家業を継ぎ社長に 釜石に直営のカフェを開店

菊地さんは、東日本大震災後に過労で体調を崩した父に代わり、2012年に家業である同社を継いだ。

「良い商品が売れる」と、実直にお菓子を作り続けてきた職人気質の父親に対し、菊地さんは家業を継ぐまで横浜や海外で営業のノウハウを培ってきた。父親とは異なり「売れる商品が良いもの」という考えのもと、品質はもちろん、マーケティングやストーリー性のある商品をと、商品開発にも気を配っているという。

また、これまでの経営を見直し、新たな分野にもチャレンジを始めた。それが、2014年に市内にオープンした直営のカフェ。店内では、生菓子を使った和スイーツはもちろん、具がたっぷりと入ったカレーやチーズハンバーグなど、SNS映えするランチも提供している。

「カフェは、直接お客様の声や反応を聴くことができる貴重な場所。新しいアイデアのヒントや励みにつながっていますね」

ラグビーのまち釜石の新名物「釜石ラグビーパイ」が誕生

2016年には、これまでの生菓子だけでなく、本格的に焼き菓子の分野にも進出。2019年ラグビーワールドカップ開催を盛り上げるため、新たな地元の土産品の開発に着手した。そこで生まれたのが「釜石ラグビーパイ」である。

あんから生地まで全てを自社で製造し、塩は宮古産、卵は岩手県産と地元産品を使用。パイの形もラグビーボール型に仕上げ、ラグビーの熱気と疾走感を出すために、パッケージデザインにもこだわった。さらに、詰合せの箱の裏面には、かつて日本選手権で7連覇を達成した、新日鉄釜石ラグビー部の戦歴を記載し栄光を称えた。

「もしヒットしなかったら、廃業も考えよう」と、ある意味背水の陣で開発に挑んだラグビーパイは、いわて特産品コンクールで市長会会長賞を受賞。「ワールドカップ開催を契機に、釜石の土産品として定着した」と思えるまでの商品となった。

菊地さんは「結果を出すと人は成長します。ですので、今後もどんどん新たな商品開発にチャレンジしていきたいですね」と笑顔で話してくれた。

釜石・大槌地域産業育成センター長と新事業について打合せ。

菊地さんの ある日の動き

- 8:30 **出社**　子どもを保育園に送った後、会社に向かう
- 9:00 **メールチェック**　取引先などからのメールを確認する
- 9:30 **打合せ**　経理担当者と売上などについて報告を受ける
- 11:00 **打合せ**　デザイナーが来社。商品のパッケージのデザインについて話し合う
- 12:00 **昼食**　商工会議所やまちづくり協力隊のメンバーなどと会食。アイデアや意見を交換する
- 13:00 **売り場のチェック**　車で盛岡市内へ。商品を置いているデパートや商店を回り担当者から話を聞く
- 18:00 **退社**　会社に戻った後、保育園に子供を迎えに行ってから帰宅

社員に聞く

前川 孝志さん

時代の流れをつかむアイデアマン 地元愛あふれる若社長

初代、2代目そして3代目の菊地社長のもと、長く小島製菓で働いてきました。菊地社長の実行力と行動力は、先代、先々代に通じるものがあると思っています。そして、時代の変化を敏感に感じて、スピード感をもって新しい事業や商品を次々と打ち出しています。

最初は心配でしたが、今では「3代目の考えについていけば大丈夫」と安心しています。

地元愛が強く、会社のことだけではなく釜石市の復興、未来についても考える菊地社長をこれからも支えていきたいです。

岩手県ではたらく魅力

渡米がきっかけで膨らむ和菓子を海外で売る夢

「子どもの頃は、面白いところが一つもない田舎だと思っていて、本当に釜石が嫌でした」と菊地さん。中学校を卒業すると盛岡市内の高校へ進学し、卒業後は大学進学のため首都圏へ。「とにかく何か面白いことを見つけるため東京を目指しました」

大学生の頃には夏休みを利用し、当時アメリカに住んでいた姉をたびたび訪問していた。当時、姉がお世話になっていた実業家の夫婦に、実家が和菓子屋であることを話すと、「これから必ず世界で和菓子のブームが来る。まずは日本で経営とセールスを学びなさい」とアドバイスされた。

さらに夫妻からは、「将来ビジネスを始めるなら、富裕層と付き合っておきなさい」とも言われたそうで、大学卒業後は「外車のセールスならお客様に富裕層が多いだろう」と考え、横浜市内の外車販売店に就職した。

夢の実現のためカナダへ受け入れられなかった餡

アメリカ人夫婦のアドバイスを受け、「北米で和菓子を販売しよう」と考えた菊地さん。外車の販売でためた資金を基にカナダに渡り、1年後に就労ビザを取得。トロントでIT企業の採用活動をサポートする仕事に就きながら、マーケティングと経営について学んだ。

そんなある日、夢実現の第一歩として、大福を自作し、カナダ人に振る舞ったものの、その評判は「良くなかったですね」と菊地さん。

「小豆を甘くした餡が、受け入れられなかったようです。自分自身がどれほど美味しいと思ったものでも、販売するその土地で受け入れなければ、意味がないということを思い知らされました」

こうした経験から、今後の展開をどうしようか考えていた矢先に実家から父親が倒れたという知らせが届く。

「それまで、実家の経営はもちろん、本格的な和菓子の作り方も知らなかった」。帰国した菊地さんは、父親の入院中も病院に通うものの、全く会話ができないまま、ついに他界されてしまう。そのため、何の知識もないまま菊地さんは家業を継ぐこととなったのである。

釜石の新しい魅力を作り地元に若者を呼び込みたい

その後は地元で開かれる勉強会などで会社経営について学び、和菓子作りは、社内の職人から聞いて学んだ菊地さん。

会社の経営状況が決して良好ではないことが分かると、利益率の低い日配品から、付加価値が見込めるお土産品などに徐々にシフトすることを決断。新商品の開発にも積極的に取り組んできた。

新工場の準備についてスタッフと打合せ。

良い物を作っても、消費者に受け入れられ、売れなければ利益にはつながらない。カナダでの苦い経験から思いついたのが、単に「お菓子を販売するだけの会社」ではなく、「釜石には面白いことするお菓子屋があるといわれるような会社になる」というアイデアだった。

「会社としてはお菓子を作る会社ですが、お菓子作りを軸として多面展開を図り、釜石の魅力を自分から創り出していけば、それが街の魅力となり、現在少なくなっている若者も釜石に戻ってきて、活気が生まれるのではないか」。この考えが、後のカフェの経営やラグビーパイの開発につながった。

かつて「面白いことが一つもない」と思っていたものの、今では釜石に「面白いこと」を創り出そうとしている菊地さん。今後は、話題の生食パンの製造や、子ども向けのお菓子をインターネットでオーダーメイドする事業を始めるという。「コンテンツ作りは本当に楽しい。とてもやりがいがある仕事です」と笑顔で話してくれた。

豊かな風味が人気のくるみだれアイス。

材料にこだわった釜石ラグビーパイ。

菊地さんのオフショット

子どものころから釣りが趣味だったという菊地さん。「釜石市内のポイントは熟知しています」と胸を張る。

車にはいつも釣り道具を積み込み、休みの日や空き時間を利用して気分転換を図っているという。

「仕事の事をいろいろと考えている毎日だけに、何も考えずにボーッとできる時間を過ごせる釣りは最高のリフレッシュ方法です」と話す。「いつか、手漕ぎボートを手に入れて、ボートフィッシングにも挑戦したいです！」

企業情報

有限会社小島製菓

所在地	岩手県釜石市上中島町 1-2-38
TEL	0193-23-6376
HP	http://www.kojimaseika.com/
代表取締役	菊地 広隆
創業	1965 年
資本金	1000 万円
従業員数	19 人（2020 年 12 月現在）
事業内容	菓子製造、カフェの運営

後輩へのアドバイス

現在はオンラインでさまざまなことができる時代です。東京でしかできないことは減り、地方でもできることが増えたと思っています。これからの進路選択は、「どこで」でなく「誰と」、「何をするか」を考えることが大事です。

だからこそ、地元で働くことを選択肢の一つとして考えてみてください。自分の成果が地元の地域貢献につながるので、やりがいを感じることができるし、子どものころからの仲間と一緒に何かをする楽しさもある。

私は釜石で、若い人たちがワクワクできるような場所や仕事を作っていきたいと考えています。一緒に楽しいことができるといいですね。

ジモトではたらく

地域の魅力を全国に発信 住田町のファンを増やしたい！

植田 敦代さん
一般社団法人SUMICA
副代表理事
2015年設立　盛岡市出身　35歳

明治時代の商家を再生 誕生したコミュニティ施設

岩手県南部の沿岸部と内陸部を結ぶ山あいにある住田町。中心地域の世田米地区に建つ「まちや世田米駅」は、2016年に完成した公民館の機能を兼ね備えた住民交流拠点施設である。コミュニティカフェや地産地消レストランなどが併設され、地元の採れたて野菜を販売する朝市なども行われている。

植田敦代さんが副代表理事を務める一般社団法人SUMICAは、町の指定を受けてまちや世田米駅の管理・運営を行っている。「この施設は、国の登録有形文化財に指定されている、豪商の住宅をリノベーションしたものです。住民のコミュニティスペースとして活用するほか、施設を核に交流人口の拡大や観光振興などにつなげる狙いがある」という。

植田さんは施設の完成前からプロジェクトに参加し、町役場の担当者や建築家と一緒に話し合いを重ねた。こうして、明治時代に建築された商人の住宅と土蔵は、地域の歴史的、伝統的な魅力を今に伝える拠点として生まれ変わった。

東京と住田町を橋渡し 「関係人口」の拡大に力を注ぐ

「私の重要な役割は、関係人口の拡大です」と植田さん。「関係人口」とは、移住による定住人口でもなく、観光に来た交流人口でもない、地域や地域住民と関わりたい「熱烈なファン」となる人たちのこと。関係人口の拡大は、地域との関係性が強まることによって、将来的には定住に繋げることが狙いで、国が推し進める地方創生の一つの柱だ。

それだけに、住田町にゆかりのある人や、関心を持っている人を掘り起こすため、積極的に東京へ出かけ交流を深めてきた。そしてこうした人たちを、田舎の暮らしや食を体験するイベントの参加者につなげてきたという。

イベントの参加者に住田町の魅力を説明。

朝市で販売する新鮮野菜。

これまで、首都圏などから多くの人を呼び込むことができたのは、「東京の大企業で鍛えた、人と信頼関係を築くスキルのおかげです」と話してくれた。

大学進学を機に東京へ 故郷・岩手県のために帰郷

植田さんは、住田町と同じ県の盛岡市出身。大学進学のため上京し、卒業後は人材斡旋サービスなどを提供する大手企業に就職。都内で法人向けの営業職として働いていた。

しかし東日本大震災を契機に、「岩手のためにできることは何か」を考え、2012年に住田町に移住。2015年にはUIターン者と共に、一般社団法人SUMICAを立ち上げた。自然や文化、住田町での暮らしの発信や交流イベントの企画など、まちを盛り上げるさまざまな活動を展開してきた。

植田さんたちの活動には、地域住民の協力は欠かせないが、地域の人たちは、活動に対して協力的で、「多少の無理なお願いでも、快く引き受けてくれますし、物事を進めるスピード感がすごく早い。とてもありがたいことです」という。また、どんな活動をするにしても、自分たちは「地域を知り尽くした方々にはかなわない」と感じながらも、地域の人たちの協力に、結果で応えたいその一心で、住田町と他の地域をつなぐ活動に汗を流している。

今後は、まちや世田米駅を拠点に、地元の若者や子どもたちが参加できる企画を打ち出していきたいという。「若者が故郷に誇りと愛着を持ってもらうための、土壌を作っていきたいです」

植田さんのある日の動き

- **6:30 出社**　朝市の準備に取り掛かる
- **7:00 朝市開始**　地元で栽培された野菜を販売。朝市は、まちの人との貴重な交流の場となっている
- **12:00 昼食**
- **13:00 来客対応**　施設の視察に対応。商店街を歩きながら、まちを案内する
- **15:00 写真撮影**　まちの日常や風景を撮影するため外出。画像はインスタグラムで公開し発信する
- **17:30 終業**

スタッフに聞く

岡田 優衣さん

安心できる空気づくりのプロ 町民からの信頼も厚い

いつも明るく何事にもポジティブに考え行動する植田さん。私たちスタッフや地域のみなさんが安心して活動できるような雰囲気を作ることがとても上手な方。地元の人たちからも信頼されている、住田町のコミュニティづくりには欠かせないキーパーソンです。

私は、結婚をきっかけに東京との2拠点生活を送っています。これからも住田町と関わりを持ち続けたいと思っているので、植田さんに相談してアドバイスをいただいています。

岩手県ではたらく魅力

東京就職にあこがれ上京 コミュニケーションスキルを学ぶ

岩手県盛岡市出身、花巻市育ちの植田さんは、当時の暮らしを「隣近所のうわさ話が家庭から聞こえてくるような、狭い社会での生活が嫌でした」と振り返る。そんなこともあって「早く地元から出たい」、「日本の中心東京で暮らしたい」という思いを募らせ、大学への進学を機に上京した。

大学生の時に居酒屋でのアルバイトを経験。店長やスタッフとの関わりや、お客様と接する仕事を通して、自分自身が人と関わることが好きなことに気づくことができた。

大学卒業後は、人との関わりが多い、人材斡旋サービスなどを提供する大手企業に就職。入社当時は、リーマンショックの影響で、企業の求人が大きく低下した苦しい状況。それでも、各企業の採用担当者の懐に果敢に飛び込み、信頼関係を築いていった。

「一つのプロジェクトに多くの人を巻き込み、一緒に成功を目指すようコーディネートするスキルは、東京時代に身に付けることができたものだと思っています」と植田さんは当時を振り返る。

震災を機に岩手県にUターン まちのコミュニティに飛び込む

憧れの東京で、仕事のスキルもキャリアも順調に積み重ねていた2011年3月、東日本大震災が発生した。当時ニュースで地元岩手県の沿岸部が津波に襲われる映像を目の当たりにし、衝撃を受けた植田さん。さらに震災によって、高校時代の友人が亡くなったことや、当時交際中だった現在のご主人が実家の釜石市に戻る決意をしたことも転機となった。

「当時はこのまま東京で仕事を続けていてもいいのか、岩手県のために何かできることは無いか。そんなことばかり考えていましたね」と植田さん。そんな折、「いわて復興応援隊」の募集を知って応募を決断。2012年に住田町へ移住した。

応援隊の配属先は観光協会。観光振興や地域活性に力を注いだ。地域の人とも積極的に交流し、自らまちのコミュニティに切り込んでいったという。「誘われた飲み会はほぼ参加しました。そこでつながった人たちが、今でも協力者や仲間となって、互いに支え合ったりしています」

朝市で地元の新鮮野菜を販売する

ゆっくりと流れる時間と四季を体感できる魅力

住田町での暮らしは、「時間や人に縛られることなく、自分のペースで仕事を進めることができる」と話す植田さん。正午を町内放送のチャイム音で知るというように、時計を気にすることなく一日を贅沢に過ごしているような感じがするという。

また、まちの面積の9割が森林という住田町では、木々から四季の移り変わりを感じることができることも魅力の一つ。「秋になると一面が赤や黄色で鮮やかに彩られ、畑に実った作物や干し柿づくりなどからも季節を感じることができます。東京では経験できない豊かな生活です」

職場も自宅から徒歩5分という距離にあり、かつて満員電車に1時間揺られながら感じたストレスとは無縁。東京に比べ、買い物や移動に不便を感じることは確かにあるものの、それがストレスや不満につながることはないという。

「特に今の時代は、ショッピングも打合せもインターネットを通じてオンラインで行うことが可能です。これは、地方で暮らすということにメリットになると思っています」

タケノコ掘りで住田町の魅力も掘り起こす。

ユニークなめがね橋が、用水路橋として水田を潤し続けている。

植田さんのオフショット

「地域の服屋でお話をしたり、いただいた食材で料理をしたりして楽しんでいます」と植田さん。仕事で東京に出かけることも多いので、休みの日は住田町でゆっくり過ごすという。

趣味で楽器を演奏する夫の練習に同行し、音楽の時間を楽しむことも。「練習は、世田米商店街にある土蔵を活用したギャラリーで行われています」。住田町で仕事でもプライベートでも贅沢な時間の使い方をしている。

後輩へのアドバイス

働き方改革や地方創生が進み、これからはもっと仕事の形が変化していく世の中です。オンライン化が進み、地元でもできる仕事がもっと増えてくるでしょう。

また、副業が認められ、地方と都会でビジネスをするという働き方もさらに普通になると思っています。

もちろん一度地元を離れて世界を広げることも選択肢の一つですが、ますます働き方が多様化する時代だからこそ、みなさんが生まれ育った地元で何ができるかについて考えてみてください。

企業情報

一般社団法人 SUMICA

所在地／岩手県気仙郡住田町世田米字世田米駅13
TEL／0192-22-7808
HP／http://machiya-sumita.iwate.jp/
代表理事／村上 健也
創業／2015年
従業員数／7人（2021年1月現在）
事業内容／住民交流拠点施設の指定管理、イベントの実施　等

都会と地方の違い

―働きがいの意識調査から―

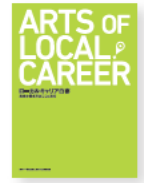
慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
特任教授　**横田 浩一**さん

東京と地方都市それぞれで働く人へのアンケート調査

調査概要

CARRER FOR（事務局：一般社団法人 地域・人材共創機構）が「ローカルキャリア白書2019」の中で報告したアンケート調査。東京都と地方都市（岩手県釜石市、長野県塩尻市、岐阜県の一部、石川県七尾市、島根県雲南市）の18歳以上のビジネスパーソンから577サンプルを回収。

また、UIターン移住者のサンプルをより多く集めるため、125サンプルを回収した。



働きやすさと働きがい 仕事満足度は変わらない

働きやすさ、働きがい、仕事への満足度について、「そう思う（5）」と「ややそう思う（4）」を足した値は、東京と地方（地域）でほぼ変わりませんでした。（図1、2、3）

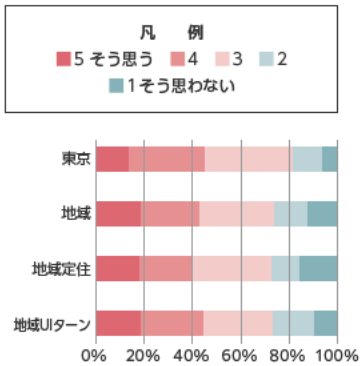


図１：いまの職場は働きやすい

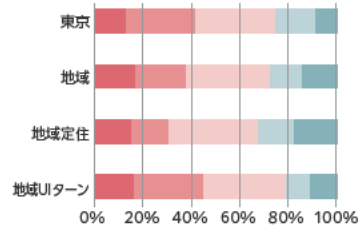


図２：私は働きがいを感じている

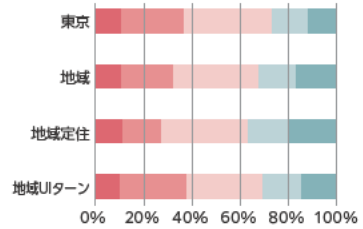


図３：いまの仕事に満足している

このことから、「東京か」「地方か」という場所だけで仕事を選択しなくても良い環境が整いつつあることが、調査結果からもうかがえます。

ここに住みたいという意思が働きがいに影響する

地方にUIターンした人は、東京や地方にずっといる人（地域定住）と比べて働きがいや仕事満足度が高いという結果になりました。（図2、3）

さらに、職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた人や、仕事を通して成長や地域貢献を感じている人が多い結果となりました。（図4、5、6）

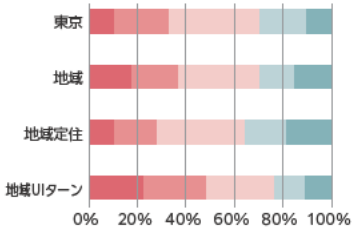


図４：私の職場の選択を「やりたいこと」で決めてきた

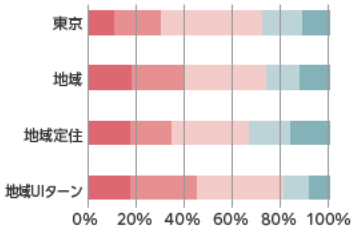


図５：私の仕事は地域（社会）に貢献している

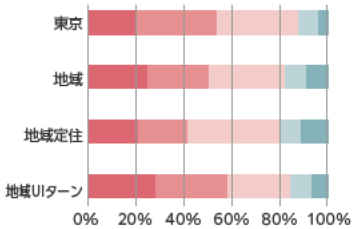


図６：仕事を通じて人間として成長できる

地方にUIターンした人は「地元に戻りたい」「この地域に住みたい」と移住や仕事を決め、高いモチベーションを維持しながら仕事に取り組んでいます。こうした強い意志と充実感が働きがいや仕事満足度に表れています。

地方の仕事は自分の影響力を実感できる

「私の仕事は周りに大きな影響を与える」と感じている人は、地方の方が高くなりました。（図7）

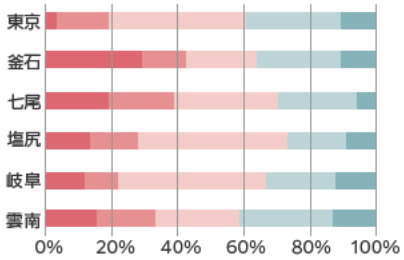


図７：私の仕事は周りに影響を与えている

地元で働くことを考えよう

若い時は、物や情報にあふれ便利な都会生活にあこがれを抱くのは仕方のないこと。就職活動をする学生も、地元を出て就職したいと、首都圏の企業に関心を持ってしまいがちです。

一方、地方にも魅力的な企業や、地元に貢献できる働きがいのある仕事がたくさんあります。また、地元では、自然豊かな住み慣れた場所で、家族や友達と共に安心して暮らすことができるはずです。

この冊子に登場したみなさんは、地元や移住先に魅力を感じながら充実した毎日を送っています。みなさんの地域でも、地元の魅力を知っている社会人がきっといるはず。

こうした人たちから直接話を聞いて、これまで気づかなかった「ジモトではたらく」魅力について考えてみましょう。

仕事の規模や動くお金の額は、東京の方が大きいことが想像できますが、周囲への影響については、地方の方が実感できるという結果となりました。

地方では、地域のさまざまな人と関わりながら、プロジェクトを成し遂げることが多く、その時に「ありがとう」と感謝されたり、自分の成果が目に見えやすかったりすることが、影響の実感につながったと考えられます。

一方、東京の場合は、大きな組織の中でビジネスが動くため、個人の影響を実感しづらいのかもしれません。

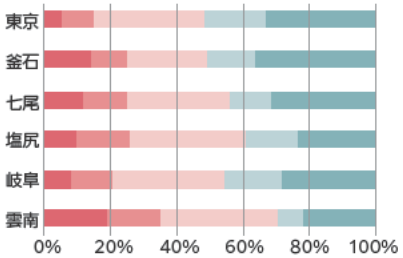


図８：定期的にあって話す地域コミュニティがある

人のつながりを強く感じる地方での働き方

地方では、身近な地域コミュニティを持っているという回答が東京より高くなりました。（図８）

市民や行政、ＮＰＯなど、多種多様な人が関わっている地方では、人と人とのつながりが強く、東京の場合は、ビジネスライクの付き合いもあり、どちらかといえば関係が薄いと考えられ、人のつながりという観点からは、地方と東京で違いが見られました。

被災地で強く感じる人への感謝と働きがい

「人生において感謝することがたくさんある」という項目について、釜石市では半数以上の人が「そう思う」と回答しています。（図９）

これは、震災復興に向けたつながりや、共助の経験が反映されたと考えられます。

また、釜石では、これまで復興支援に多くのボランティアが集まり、そのまま定住した人が多くいます。「復興のため」という明確な目的をもって移住し、地域の人と共に働いている被災地は、どの地域よりも働きがいを実感できる場所ではないでしょうか。

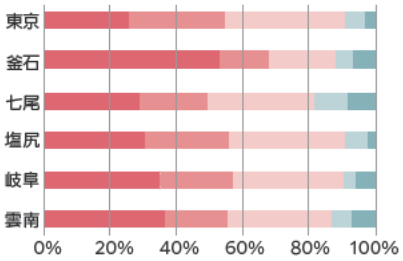


図９：私は人生において感謝することが多い

問い合わせ先

復興庁雇用促進班
TEL. 03-6328-0274